

## 【書評】

### 植村邦彦『ローザの子供たち、あるいは資本主義の不可能性 ——世界システムの思想史』

平凡社，2016年，232頁

「ありそうでなかった作品」というのが、本書を手にとった第一印象である。

資本主義を、その論理やメカニズムにおいてではなく、実体として何に（あるいはどこに）同定するかは、容易に同じ議論の土俵を見出すことのできない大きな問題であり、マルクス主義の内部においても、いくつかの考え方の分岐がある。この問題について、資本主義は（イングランドなりプロイセンなり）特定の「社会」における階級関係に同定されるという立場が、マルクス主義におけるひとつの正統的な系譜であるが、いわゆる世界システム論は、資本主義がそうした個別の「社会」に同定されるものではなく、最初から「世界」性を持ったシステムとして同定されるべきだという立場に動機づけられた系譜である。

ここでいう「世界」は、ある種の全体性をもちつつ、実体的には外部を有する「システム」を意味しており、むしろその外部を不断に取り込むことで動的に存立している。こうした「世界」に資本主義を同定する理論の系譜的起源のひとつにローザ・ルクセンブルクがいるということは、マルクス主義理論史の教科書的な理解の範囲に入ると思われる。この意味で、世界システム論が「ローザの子供」であることは、世界システム論に関心を寄せるものならば、誰もがあえて反省するほどでもなく気が付くことであり、なかば暗黙に当然視していたことであろう。その意味で、この作品は書かれてみればいかにも「ありそう」であったが、同時に書かれるまではあえ

てその検証の労をとるものがなかったことにも気づかされるのである。

本書の基調を定めるのは、ローザ・ルクセンブルクとロシア・マルクス主義との対立である。マルクスは資本主義をもともと世界資本主義として捉えていたが、その世界資本主義と国家との関係についてはあいまいであった。ルクセンブルクは、資本主義をたえず非資本主義的外部を包摂することでしか持続できない動的な矛盾のシステムとして捉え、そのようなシステムとして資本主義は世界資本主義としてしかありえないと主張するのに対して、ブハーリンからレーニンへのロシア・マルクス主義の系譜は、暗黙に個別の社会におけるブルジョワとプロレタリアートの関係として捉え、「世界資本主義」に言及するときにも、単にそのイメージを世界規模に抽象的に投影した語法にとどまる。ルクセンブルクが「資本主義世界経済」という言葉を用いるのみならず、ブハーリンやレーニンが「世界資本主義」や「資本主義世界システム」という言葉を用いながら、その意味が全く異なっていることを、著者は本書の最初の2章で丁寧に解きほぐしている。

実際のところ、20世紀の前半において資本主義の歴史を語る際の文法となったのは、レーニンのパラダイムであった。著者はロストウを参照することで、資本主義を個別の社会の発展段階の問題として捉えるパラダイムが、マルクス主義の内部に限られたものではなかったことにも注意を促している。このパラダイムのもとで、資本主義をグローバルな

構造の問題と捉える視角はいわばカウンター・パラダイムの位置に置かれることになり、対立の概念的構図は、多くの社会が自らの「近代化」の評価を迫られる際に、様々な場面で反復されることになった。たとえば、いわゆる講座派と労農派のあいだの日本資本主義論争もその1つの変奏とみることができる。

本書のボディーである第3章から第6章までの4つの章では、アンドレ・グンダー・フランク、サミール・アミン、イマニュエル・ウォーラーステイン、ジョヴァンニ・アリギという世界システム論の主要論者——彼らの若かりし日の自称に従えば「ギャング・オブ・フォー（四人組）」——のテキストにおけるルクセンブルクの影響が丹念に跡付けられている。冒頭で述べた通り、彼ら四人が程度の差こそあれ共通してルクセンブルクの影響を受けていること自体に驚きは無いが、影響が確認できる箇所がテキスト上で同定されていることの意義は小さくない。またいわばルクセンブルクのアプローチを共有しながら、それぞれが展開した論点のあいだに生じた重心の偏差を通覧できることにも意義がある。本書は、資本主義論としての世界システム論について、その内部における理論展開の学説史をコンパクトに解説する作品としても読むことができる。

20世紀の後半において、歴史学のパラダイムは近代化論の批判へ移った。個々の社会について発展段階を縦に追うのではなく、むしろ横のつながりに個々の社会の歴史を開くことが新たなパラダイムとなった。世界システム論はその新たなパラダイムの最も重要な参照枠組みになった。資本主義論のカウンター・パラダイムとしてのルクセンブルクが、その「子供たち」によって（ある意味でヘゲモニックな）パラダイムとして蘇ったわけである。ただこれで物語が終わりというわけではない。資本主義論には次のパラダイム間対

立があるように思われるからである。それは、有限性のパラダイムと無限性のパラダイムの対立とでも呼べそうなものだ。

終章で著者もシンパシーを隠さず述べているように、絶えず外部を包摂する動的矛盾として世界資本主義を捉えるルクセンブルクのパラダイムは、資本主義が有限性に埋め込まれていることを示唆する。そしてその世界の有限性は資本主義の持続不可能性の根拠に直結している。実際、世界システム論は資本主義の終焉を説く議論のひとつの典型として理解されているし、本書のタイトルもそういう理解を示している。だが、たとえばドゥルーズの哲学などの影響のもとに、有限性の根拠となっている「外部」が固定的に存在するのではなくむしろ内部において不断に構築される、あるいは生成するものであるという着眼に立って、資本主義をむしろ無限性のもとで捉えようとするパラダイムが、情報技術や生命技術、あるいは人間科学などの急速な進歩に伴う社会変容を追い風として説得力を高めている（それらのテクノロジーは、世界の有限性の根拠としての自然環境や人間の尊厳、あるいは人間間の根源的な信用などの再定義を迫る）。その意味で、いまや「ローザの子供たち」はむしろカウンター・パラダイムからの挑戦を受ける側に立たされているのである。

本稿を執筆している最中にサミール・アミンの訃報がもたらされ、本書が主題的に扱う4人の世界システム論者のうち存命なのはウォーラーステインひとりとなった。そのウォーラーステインがかつて拠点としたニューヨーク州立大学ビンガムトン校では、ジェイソン・W. ムーアのような、むしろ無限性のもとで資本主義の乗り越えを捉えようとする論者が彼の後を襲っている。物語は第2幕へと移りつつある。

(山下範久：立命館大学)